

訳者あとがき

さてみなさん、いまお手にとっておられるのは、かのウィリアム・バロウズとかのジャック・ケルアックの幻の共作、伝説の『カバ本』だ。なぜ伝説だったかというところ……これまで公開されたことがなく、実際に読んだことのある人がほとんどいなかったからだ。が、あのバロウズとケルアックの共作となれば、いやがうえにも期待は高まる。いずれも二〇世紀アメリカ文学を代表する存在だし、それぞれ従来とはちがった新しいスタイルを切りひらいたパイオニアだ。その両者のコラボともなれば……

ぼくも、こんな小説があるということは知っていた。バロウズが自分の作家としての経歴を語るときに、必ずといっていいほど触れるからだ。カー・カマラー事件をネタにケルアックと共作をしたけれど、発表しないことにした、と（たとえば『バロウズという名の男』（ペヨトル工房）p 22）。当時は、カー・カマラー事件というのが何なのかもわからなかった（カー・カマラーという名前の一の人物だと思っていた）。また、その中身について詳しいことがわかったのは、テッド・モーガンによるバロウズ伝『文学のアウトロー』で、本書をネタに丸ごと一章が書かれたからだ。いま、この現物を見たあとでモーガンの記述を読むと、ほとんどこの小説のストーリーをそのままなぞった記述になっている……というべきだろうか。あるいはむしろ、本書の記述に全然文学的な処理がなく、あったことをそのままダラダラ書いているだけなので、事実関係を追っていったら本書の中身と同じになるしかなかった、と考えるべきなのかもしれない。ついでにこの伝記の記述で、バロウズの見栄張りもばれてしまった。発表しないことにしたんじゃなくて、売れなかっただけ、だったのだ。

こと左様に、本書は「小説」と言いつつ、小説的な処理はまったくない。ケルアック（マイク・ライコー）とバロウズ（ウィル・デニソン）が、「今日こんなことがあった。あいつがこんなことを言った。そしたらあいつはこう言った。そしてみんなでどこそこに言った」と継時的に書いているだけだ。そしてその書き方の平板さ、ダイアローグの退屈さ加減は、ちょっとただごとではないほど。翻訳では、この原著の下手くそさ加減、推敲のあとなどまったく見られない書き殴り感をなるべく出すようにしてみたつもりだが、どんなもんだらうか。

さてその内容は実在の人物による実在の殺人事件をもとにしている。これについてはバロウズの愛人秘書で遺産管理人のグラワーホルツのあとがきに詳しい。詳しくすぎるくらい。別にことさら重要な事件でもない、ただの痴話げんかで、それについて詳しく知ってもまったく意味はない。グラワーホルツはそれを何やら文学史上の一大事件のように言いつのろうとするが、そんなご大層なものではない。一応、ケルアックは殺人者のほうのルシアン・カー（フィリップ・トゥリアン）側の話を書いて、デニソンは殺された側のデイ

ブ・カマラー（ラムゼー・アレン、通称アル）の話をしているのだが、両者がつるんでいることが多いため、ちがう視点が全然出ておらず、それぞれのキャラクターや動機についても深い洞察がまったく見られない。当時、これを出版しようという版元はどこにもなかったという。まあ当然だろう。たぶんその売り込みを引き受けた文芸エージェントは、最近の殺人事件をネタにした実録モノとして売り込もうと思っただけなんじゃないだろうか。そして、その実録モノとしての価値も、どこまであるやら。実際の殺人の状況については、犯人が淡々と語る以上の話はまったくない。当時の人が新聞で読んで知っている話しかないわけだ。うーん。これではなかなか。もう少しリアルな、真に迫った殺人描写でもあれば……だが柳下毅一郎がしばしば言うように、実際の殺人なんてそんなドラマチックなものではなく、つまらない退屈なものなのかもしれない。が、それが本として売れるかといえば、それはまた別の話だ。

そんなわけで、本書そのものの価値をどこまで認めるかは、まあかなり微妙、というより苦しいところだ。だがいま、パロウズもケルアックも作家として名を成し、他の作品がでてきたところで振り返って見ると、本書の中にも両者の書きぶりの差はある程度出ているんじゃないかと思う。

パロウズは、どちらかといえばものの様子を細かく描く。コートの生地はなんだったか、人々がどんな服装でどんな表情をしたか。一方、ケルアックはそうした風景描写があまりない。むしろ人々が何をしたかが中心だ。だれが何を言った、ぼくはこう言った。むろん、その差はすさまじく強く感じられるというものではない。言われてみればそんな気がする、という程度だ。好意的に見ると、それは意図してのことなのかもしれない。本作品では、二人は一本の小説を書こうとしているので、多少は文体をそろえようとしているので、差があまり出なかったのかもしれない。一方で、当時の二人は小説家としてあまりに未熟で、書き方に特色が出せる域にとうてい達していなかっただけなのかもしれない。ぼくは、後者のような気がするが、それは読者のみなさんの判断にもよる。

また、パロウズの書いたウィル・デニソンの章は、小説としての工夫が多少は見られる。たとえば、伏線を張ろうという努力がある。たとえば十四章や十六章に出てくるダニーと棍棒や火事の話は、ずっと前の三章に出てきた話の続きだ。むろん決してうまい伏線ではない。そこに至るまでほとんどの人はダニーがだれだったかも覚えていないだろう。いきなり「あの棍棒で殴った」「火事がどうした」と書かれて、それがどの棍棒だったか、なぜこいつが火事の話をしているのかわかる人はほぼいない。でも、ケルアックの章にはそれすらない。これは作家としての特性の差もある。ケルアックは『オン・ザ・ロード』を見ればわかるように、伏線とか複雑なストーリーの絡み合いを考えない。単線で主観的にひたすら一本の叙述を書き続けるのがかれのスタイルだ。本書も、そのスタイルの萌芽が見られると言えなくもない。あくまで強いて言えば、ではあるのだが……

個人的には、本書はあくまで習作レベルにとどまるものだとは思っている。パロウズもケルアックも、作家になりたいとは思っていたが、何をどう書けばいいのか右も左もわからない状態だった。作家として名を成したあとの著者二人は、本書をどう思っていたのだろうか。パロウズはいつもヘミングウェイを引き合いに出して、死ぬ前に昔の原稿とか全部処分しておかないとだめだぞ、そうしないと若かりし日の恥ずかしい代物やら失敗作やらをあとから大量に発掘されてしまう、と述べていた。天国（または地獄）のパロウズ（そしてケルアック）は本書を見て、隗より始めよ、ということばをかみしめているかもしれない。

い。あるいは妻を殺してしまった後のパロウズなら、本書で描かれた殺人について、たぶん一九四五年当時とはちがった見方をしていたかもしれない。一方でケルアックはずいぶん後まで本書を出したがっていたという。あとがきによれば、ケルアックによる本書の改訂バージョンもすでにあるとか。いつの日かそれを読むことができれば、ケルアックの作家としての成長が如実にうかがえるかもしれない。

本書の来歴や内容については、あとがきに詳しいが、そこでも触れられていない謎は多少はある。たとえばかつてのタイプ修正版の表紙で、ジャック・ケルアックは自分の名前をジョン・ケルアックと書いている。なぜそうしたのはわからない。パロウズがウィリアム・リーを名乗ったのは、かれが当時、『ジャンキー』刊行までずっと使っていた筆名だからだ（『ジャンキー』の頃は、内容が後ろ暗いので家族への配慮で変名にしたという説が強かったが、パロウズはそれ以前からこの筆名にしている）。ケルアックもひょっとして、筆名を使うほうがかっこいいと思ったんだらうか？ またウィル・デニソンとか、マイク・ライコーというそれぞれの筆名にも何か意味があるのだからうか？ だがもちろん、深読みしてもいいが、おそらくあまり意味はないのだから。

そしてそのあとがきでもう一つ書かれていないこと。本書は実は、二人（特にパロウズ）の作家としての経歴の出発点となるどころか、実は終止符ともなりかねない一作ではあった。パロウズは当時、親のすねをかじりつつニューヨークでボヘミアン暮らし（といえば聞こえはいいがニート状態）。ケルアックもご同様だ。特に年配のパロウズは、作家になりたいと思いつつも、書くものがどこにも売れずに自分の才能にますます自信を失いつつある状態だった。長編としてほぼ初めて書き上げた本書がまったく売れなかったことでパロウズはさらに自信を喪失し、作家としての経歴を一時はほぼ断念したのだ。

本書の後で、パロウズはドラッグに手を出すようになり、そしてメキシコに移住して『ジャンキー』を書く。さらにその地で妻殺しを経てタンジール生活、脱ドラッグを経て、かの『裸のランチ』が誕生する。だがそれはずいぶん先の話となる。ある意味で、本書はパロウズと関連づけられるこうした各種できごと以前の、一つのまとめだった。本書を句点と考へ、それまでのパロウズ人生の総括と考へて、それ以降のドラッグに始まるエピソードは人生のまったくちがう段階ととらえるのか、それともパロウズの長い人生の中で、単なる一つの読点と考へるのか、それはあなた次第。そしてケルアックにおいても、本書の位置づけをどう考へるか。本書の記述に「オン・ザ・ロード」の面影をいささかでも見て取るか、あるいはまったく別物と考へるのか。それは本書を手にとられる読者諸賢一人一人の判断に委ねるしかない。

翻訳にあたっては、William Burroughs and Jack Kerouack, *And the Hippos were Boiled in Their Tanks* (2008) のイギリス版、アメリカ版それぞれを使っている。ただし両者は中身はページの組み方も含めまったく同じなので、二つ参照したことに特に意味はない。念のため、である。訳に特にまちがいはないと思うが、お気づきの点があれば、訳者までご一報いただければ幸甚。訂正などあれば、サポートページ <http://cruel.org/books/hippos/> で随時アナウンスする。

2010年3月20日 東京にて
山形浩生 (hiyori13@alum.mit.edu)